

I. はじめに

1. 問題の所在

発達障がい当事者による当事者研究は、綾屋・熊谷¹⁾の先駆的業績以降、急速に発展してきた。熊谷⁵⁾は当事者研究を「等身大の〈わたし〉の発見と回復」のプロセスとして位置づけ、その学術的・実践的意義を明らかにしている。近年では横道⁸⁾が、ASD（自閉スペクトラム症）とADHD（注意欠如・多動症）の当事者として、文学研究と当事者研究を融合させた新たなアプローチを提示している。横道は発達障がい当事者の体験世界を「水の中」という比喻で表現し、定型発達者とは異なる知覚・認知様式を内側から記述することの重要性を示した。しかしながら、当事者研究者自身がどのような発達経路を経て研究者・支援者となったのか、その自己形成過程を長期的視点から検討した研究は極めて少ない。

対人援助職の養成において、援助者自身の被援助経験や心理的困難が専門性にどのように寄与するかは重要な論点である。Tedeschi & Calhoun⁶⁾の心的外傷後成長（Posttraumatic Growth: PTG）理論は、トラウマ体験後の肯定的変容を説明する枠組みとして注目されている。この理論的視座は、発達障がい当事者が経験する社会的疎外や制度的排除といった「傷つき」が、支援者としての専門性へと変容しうる可能性を示唆する。しかし、この変容過程を当事者自身の視点から縦断的に記述・分析した研究は管見の限り存在しない。

特に、2005年発達障がい者支援法施行以前に学童期を過ごした世代は、適切な療育や支援を受ける機会がないまま成人期に至った者が多い。彼らは診断の遅れや支援の不在により、学校不適応、精神的危機、社会的排除といった困難を経験し、しばしば社会や制度に対する強い怒りや恨みを抱えている。この世代の当事者が支援者として自己形成する過程を明らかにすることは、今後の当事者支援者養成に重要な知見を提供しうる。

2. 本研究の目的

本研究は、発達障がい当事者である筆者自身の17年間にわたる自己形成過程を、オートエスノグラフィの手法を用いて分析することを目的とする。具体的には、以下の3点を明らかにする。

第一に、17歳時（2008-2009年）に執筆した手記群を一次資料として分析し、当時の社会的疎外感・支援者志向の萌芽を明らかにする。第二に、34歳現在の博士論文における省察と照合し、自己形成の連続性と変容を検討する。第三に、PTG理論を参照し、発達障がい当事者の支援者養成への実践的示唆を導出する。

II. 理論的枠組み

1. 心的外傷後成長（PTG）理論

Tedeschi & Calhoun⁶⁾は、トラウマ体験後に生じる肯定的な心理的変容をPTGと名づけ、その5つの領域を特定した。すなわち、①他者との関係性の深化、②新たな可能性の発見、③人間としての強さ

の自覚、④精神性・実存的側面の変容、⑤人生に対する感謝、である。PTG は単なるレジリエンス（回復）とは異なり、トラウマ以前の水準を超える成長を意味する。

宅⁷⁾は、PTG が生じるためには「中核的信念の揺さぶり」と「熟慮的反すう」が重要であることを指摘している。発達障がい当事者が経験する社会的疎外や制度的排除は、「自分は社会に受け入れられている」という中核的信念を揺さぶる体験であり、その後の意味づけ過程が PTG につながりうる。

2. 発達障がい当事者研究の展開

発達障がい当事者研究の系譜において、綾屋・熊谷¹⁾は身体感覚の「まとめあげ」の困難という観点から自閉スペクトラム症の内的世界を記述した。横道⁸⁾はこの系譜を継承しつつ、文学研究者としての専門性を活かし、当事者の体験世界を「水の中」という詩的比喻で表現した。横道は、発達障がい当事者の知覚世界が「何もかもがゆらめき、ぼんやりとした水の中」のようであると述べ、定型発達者との間にある「深刻な断絶感」を可視化した。このような当事者による内的世界の記述は、支援者養成においても重要な示唆を与える。

III. 方法

1. オートエスノグラフィーの方法論的位置づけ

オートエスノグラフィーは、研究者自身の経験を研究対象とし、個人的経験と文化的・社会的文脈との相互作用を分析する質的研究法である。井本⁴⁾は、オートエスノグラフィーを「自己の経験についての省察を通じて、より広い社会的・文化的意味を探究する方法」と定義している。

Chang²⁾は、オートエスノグラフィーの方法論的厳密性を担保するために、①自己のナルシズム的称揚を避けること、②個人的経験と文化的文脈を接続すること、③分析的・解釈的記述を行うことの重要性を指摘している。本研究では、Chang の基準に準拠し、以下の方策により方法論的厳密性を確保した。第一に、17 歳時の手記という「過去の自己」を対象化することで自己称揚を避けた。第二に、発達障がい支援制度の歴史的変遷という文化的文脈との接続を試みた。第三に、PTG 理論等の既存理論による分析的解釈を行った。第四に、分析過程において指導教員（臨床心理学専攻）による確認を受け、解釈の妥当性を検討した。

2. 分析対象とする一次資料

本研究で分析対象とする一次資料は、筆者が 17 歳時（2008 年 7 月～2009 年 3 月）に執筆した計 13 編の手記群である。これらは当時のインターネット掲示板への投稿、私的な日記・エッセイ、遺書として保存されていたものである（Table 1）。

これらの手記は、当時の筆者が意図的に「研究資料」として作成したものではなく、危機的状況における切実な自己表現として執筆されたものである。このことは、社会的望ましさによるバイアスを排除し、当時の認識や感情を生々しく捉えうるという方法論的利点を有する。

Table 1 分析対象とした一次資料一覧

【社会への憤怒・実存的苦悩に関する手記】

- (1) 「生きる意味…」：自己表現の抑制といじめ体験、生きる意味への問い
- (2) 「生きる意味そして死とは…」：信仰と自殺をめぐる哲学的考察
- (3) 「生きる事そして死ぬこと…」：親戚の死を契機とした生死観の変容
- (4) 「僕は今日まで生きてきました」：生への希求を歌詞形式で表現
- (5) 「知るという事」：情報社会における混乱と義務教育への批判
- (6) 「高校と言う名の傀儡教育」：高校中退体験と教育制度批判
- (7) 「今の俺にとっての経済論と社会」：不良文化と成功幻想への批判的考察

【トラウマ・強迫に関する手記】

- (8) 「トレイン」：鉄道自殺目撃と電車恐怖
- (9) インターネット掲示板投稿群：強迫観念、対人関係の相談

【信仰・支援者志向に関する手記】

- (10) 「僕のもの考え方」：診断をめぐる経験と強迫観念への対処法
- (11) 「これが俺の恋愛だ」：性と信仰の葛藤
- (12) 「軽度発達障がいと不登校の関係」：支援事業構想
- (13) 「遺書」(平成21年3月10日付) および関連俳句

3. 分析手続き

分析は以下の手順で行った。第一に、一次資料を繰り返し精読し、主要なテーマを帰納的に抽出した。第二に、抽出されたテーマを博士論文で明らかにした就労継続要因の理論的枠組みと照合した。第三に、PTG理論を参照し、自己形成過程を理論的に解釈した。

4. 倫理的配慮

本研究は筆者自身の経験を対象としているが、一次資料には当時関係のあった他者への言及が含まれる。そのため、個人が特定されうる情報は匿名化処理を行った。また、自傷・自殺に関する記述については、読者への配慮から必要最小限の引用にとどめた。

IV. 結果

1. 筆者の発達史概要

筆者は1991年生まれの男性である。2005年発達障がい者支援法施行時に13歳であり、学童期には適切な支援を受ける機会がなかった。高校入学後に不適応を呈し、16歳で中退。「某医大」で「広汎性発達障がい」、その後転院した「某心療内科」で「強迫性障がい」と診断された。高卒認定試験合格後、大学・大学院に進学し、2026年3月に博士号(人間科学)取得予定である。現在は放課後等デイサービスの心理職として約6年間勤務し、公認心理師、精神保健福祉士、臨床発達心理士等の資格を有している。

2. 自己形成過程の4つの位相

一次資料の分析から、17歳時の手記には以下の4つの位相が見出された。

(1) 第1位相：社会への憤怒と実存的苦悩

17歳時の手記において最も顕著なのは、社会や教育制度に対する激しい怒りの表出である。「高校と言う名の傀儡教育」では、高校中退体験を踏まえて教育制度を痛烈に批判している。「生きる意味そして死とは…」では「何も感じない何も出来ない…結果だけを見る今の社会はそうなんだ…だから俺みたいなやつには居心地が悪くてしょうがない」と、社会における疎外感を吐露している。横道⁸⁾が述べる「定型発達者との間にある深刻な断絶感」は、筆者の17歳時の手記においてもすでに鮮明に表現されていた。

重要なのは、この怒りが「普通とは何か」「生きる意味とは何か」という実存的問いと不可分に結びついていた点である。「僕のもの考え方」は「そもそも普通とはなんなのでしょうね？」という問いから始まり、社会が要請する「普通」への適合を拒否しながらも、その外部に立つことの孤独と不安が綴られている。

(2) 第2位相：トラウマ体験と強迫的反応

社会への怒りと並行して、筆者は具体的なトラウマ体験とそれに伴う強迫的反応に苦しんでいた。「トレイン」および「僕のもの考え方」では、鉄道自殺の目撃体験が詳細に記されている。「ちょうど一年ほど前電車ではよくある飛び込み自殺の現場の横を通りすぎてしまったのです…そしてそこには大勢の警察と白い布がありました」。この体験は「電車は人殺しのものだ！そして俺も死んでしまう（自殺）するかもしれないという恐怖」という強迫観念を引き起こした。

「生きる事そして死ぬこと…」では「昨年の12月自分はそれで死んでしまいたいと衝動的に考えてしまい…また自己護身の為かナイフを手放すことが出来なくなり…下手をすれば自殺をしていたかもしれない」と、危機の深刻さが記されている。

(3) 第3位相：信仰による生への繫留

社会への怒りと希死念慮の渦中であって、筆者を生に繋ぎ止めていたのはキリスト教信仰であった。「生きる事そして死ぬこと…」では「それがSSRIの効果かはたまた神の御心であるかはしれないがこうして新しい年を迎え今このパソコンの前に向かい文章を打っている」と、生存を薬物療法と信仰の両面から意味づけている。

遺書に記された「障がい者、分からぬか人間自体が障がい者」という俳句的表現は、障がいを個人の欠損ではなく人間存在の普遍的特性として捉える視点の萌芽を示している。これは、PTG理論における「精神性・実存的側面の変容」に対応する。

(4) 第4位相：当事者性に基づく支援者志向の萌芽

最も注目すべきは、社会への怒りの只中において、すでに支援者志向の萌芽が存在していた点である。「軽度発達障がいと不登校の関係 その時私は何が出来るか」では、「起業で成功後、自分と同じような人間を支援したくてたまらない」「彼ら…嫌私達は、生まれもつての才能がある人間なのである」と記されている。

ここで重要なのは、支援者志向が社会への怒りと対立するものとしてではなく、怒りを原動力として形成されている点である。「自分と同じような人間を支援したい」という動機は、「自分が経験した理不尽を他者に経験させたくない」という怒りの変形である。

また「生きる意味…」の末尾では「この事を考えることが出来たのだから自分は一種の生きる希望を持てたのかもしれませんが」と記されており、自己の経験を意味づける営みが「生きる希望」に繋がることを17歳時点で直観していた。

3. 博士論文における核カテゴリーとの連続性

筆者の博士論文では、M-GTA³⁾を用いて発達障がい当事者である対人援助職従事者の就労継続要因を分析し、《人の役に立てる実感》を核カテゴリーとして見出した。17歳時の「自分と同じような人間を支援したくてたまらない」という記述は、この《人の役に立てる実感》の原初的形態である。

重要なのは、17歳時の社会への怒りが34歳現在において「消失」したのではなく、「変容」した点である。現在の筆者は、発達障がい支援制度の不備や社会的障壁に対する批判的視座を保持しつつ、それを学術研究と支援実践という形で表現している。

V. 考察

1. PTG 理論からの解釈

17歳時から34歳現在への自己形成過程は、PTG理論における複数の領域に対応している。

第一に、「新たな可能性の発見」である。17歳時の「自分と同じような人間を支援したくてたまらない」という支援者志向は、社会的疎外という負の経験がなければ生じえなかったものである。危機を通じて、当事者としての経験を活かした対人援助という「新たな可能性」が開かれた。

第二に、「他者との関係性の深化」である。17歳時の手記に見られる「皆さんも辛いことがあっても逃げずに一緒に戦いましょう」という呼びかけは、自己の苦しみを通じて他者の苦しみへの共感が深まったことを示している。

第三に、「精神性・実存的側面の変容」である。「障がい者、分からぬか人間自体が障がい者」という表現は、障がいを個人的欠損から人間存在の普遍的特性へと再定義する試みであり、実存的な意味体系の変容を示している。

2. 発達障がい当事者の支援者養成への示唆

本研究の知見は、発達障がい当事者を支援者として養成する際に以下の実践的示唆を提供する。

第一に、「負の経験」を資源として位置づける視点の重要性である。本事例では、社会への怒りや疎外感といった「負の経験」が、支援者志向の原動力となっていた。従来の支援者養成プログラムでは、こうした負の経験は「克服すべきもの」として扱われがちであるが、本研究の知見は、負の経験を「専門性の資源」として積極的に位置づけるプログラムの有効性を示唆している。

第二に、怒りを「変容可能な資源」として捉える視点である。本事例において、社会への怒りは支

援者志向と対立するものではなく、むしろその原動力となっていた。このことは、当事者が社会への怒りや恨みを表出した際、それを単に「不適応的反応」として修正しようとするのではなく、「変容可能な資源」として受け止める支援の重要性を示唆している。

3. 本研究の限界と今後の課題

本研究にはいくつかの限界がある。第一に、単一事例（N=1）に基づく知見であり、発達障がい当事者一般への直接的な一般化には慎重を要する。ただし、オートエスノグラフィーの方法論においては、個人の経験の詳細な記述を通じて、より広い社会的・文化的文脈への示唆を得ることが目指されており²⁾、本研究もその方法論的立場に依拠している。

第二に、17歳時の手記は危機的状況における記述であり、当時の認識の全体像を完全に反映しているとは限らない。第三に、17歳時から34歳現在に至る17年間の変容過程の詳細は、中間期の資料が限られているため十分に分析できていない。

今後の課題として、他の当事者との比較検討、および当事者支援者の長期的なキャリア発達に関する追跡研究が挙げられる。

VI. 結論

本研究は、発達障がい当事者研究者の17年間にわたる自己形成過程を、オートエスノグラフィーの手法を用いて分析した。17歳時の手記群の分析から、【社会への憤怒と実存的苦悩】【トラウマ体験と強迫的反応】【信仰による生への繋留】【当事者性に基づく支援者志向の萌芽】という4つの位相が見出された。

最も重要な知見は、社会への怒りと支援者志向が対立するものではなく、「自分と同じ苦しみを他者に経験させたくない」という動機によって接続されていた点である。この変容過程は、PTG理論における「新たな可能性の発見」「他者との関係性の深化」「精神性・実存的側面の変容」に対応する。

本研究の知見は、発達障がい当事者を支援者として養成する際に、当事者の「負の経験」を専門性の資源として位置づけることの重要性を示唆している。

【謝辞】（公開査読のため秘匿）

【文献】

- 1) 綾屋紗月・熊谷晋一郎（2008）：発達障害当事者研究——ゆっくりていねいにつながりたい。医学書院。
<https://www.igaku-shoin.co.jp/book/detail/62827>
- 2) Chang, H. (2008) : Autoethnography as method. Left Coast Press.
<https://www.amazon.com/Autoethnography-Method-Developing-Qualitative-Inquiry/dp/1598741225>
- 3) 井本由紀（2013）：オートエスノグラフィー。藤田結子・北村文（編），現代エスノグラフィー——新しいフィールドワークの理論と実践。新曜社，pp.104-111. <https://www.shin-yo-sha.co.jp/book/b455674.html>

- 4) 木下康仁 (2003) : グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践——質的研究への誘い. 弘文堂.
<https://www.koubundou.co.jp/book/b156903.html>
- 5) 熊谷晋一郎 (2020) : 当事者研究——等身大の〈わたし〉の発見と回復. 岩波書店.
<https://www.iwanami.co.jp/book/b515747.html>
- 6) 宅香菜子 (2010) : 外傷後成長に関する研究——ストレス体験をきっかけとした青年の変容. 風間書房.
https://www.kazamashobo.co.jp/products/detail.php?product_id=1247
- 7) Tedeschi, R. G. & Calhoun, L. G. (1996) : The Posttraumatic Growth Inventory: Measuring the positive legacy of trauma. *Journal of Traumatic Stress*, 9, 455-471. <https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/8827649/>
- 8) 横道誠 (2021) : みんな水の中——「発達障害」自助グループの文学研究者はどんな世界に棲んでいるか. 医学書院. <https://www.igaku-shoin.co.jp/book/detail/110338>